



## 事故から 10 年後のその町で

松本 侑壬子・ジャーナリスト

3・11 後の日本で、“1986 年 4 月 26 日”と聞いて、ピンとくる人は以前より増えただろうか。この映画は、この日に原発事故の起きたウクライナ・チェルノブイリの隣町プリピャチを舞台に、事故直後と 10 年後の市民の姿を描いている。事故後 25 年経って、立ち入り制限区域内で撮影された初めての劇映画で、監督自身が入念な聞き取り調査を行って脚本化、事故当時の様子をありありと再現している。

うらかな春の日のプリピャチ。3 キロ先に巨大な原子力発電所が見える川沿いの土手で、発電所の技師アレクセイ親子がリンゴの木を植え、消防士のピョートルが婚約者アーニャとポートの上で甘い囁きを交わしている。平和だ。

翌 4 月 26 日、朝から大粒の雨が降ったり止んだりの天候不順な中、遊園地でアーニャ（オルガ・キュリレンコ）らの結婚式が行われた。幸せいっぱいのパーティで、アーニャが「百万本のバラ」を歌っている最中に、花婿は“森林火災発生”で消火活動に駆り出される。真っ暗な空に雷鳴が轟き、降りだした豪雨がそこら中を黒く染めた。前日、アレクセイ親子が植えたばかりの若木も一晩で枯れ、森ではブナの木が毒々しい赤に変色し、枝に触るともろく折れてしまう異変が見られた。戻らぬ夫の行方を追うアーニャは、病院で愛する人が体中放射能の塊となって

隔離され、モスクワの病院へ移送されたことを知る。一体何があったのか？ 殺気立った混乱の中で、誰も説明をしてくれない。

職場からの電話で原発事故を知ったアレクセイは、すぐさま窓を閉め、息子にヨウ素剤を与える。事故は電気供給量を増やそうとした 2 人の従業員によるものだと知るが、守秘義務で家族以外には誰にも何も伝えられない。激しい雨の中を家族を町から避難させるのが精一杯だ。

放射線量計測器をぶら下げたアレクセイにできることは肉屋で客に「危ないから買わないで」と囁いて変人扱いされ、自腹で買った傘を通行人に手渡すくらい。自身の科学知識が何の役にも立たない虚しさに打ちのめされ、孤独の中で精神的に追い詰められてゆくアレクセイ。

ようやく 2 日後、ラジオが原発事故のニュースを流し、一方的に住民に全員強制退去を伝える。軍が大挙してやって来て、家畜やペットが次々に殺された。アーニャも母と共に移送バスに乗り込む。町はゴーストタウンとなった…。

そして 10 年後、町はどうなったか。町は廃墟のまま結構賑やかだ。アーニャはチェルノブイリ・ツアーのガイドとして働いている。「美しすぎるから」と出演を断られかけた元バンド・ガールのキュリレンコの演技が素晴らしい。美しい顔の目の下に少しずつくまができ、やつれてくる様子がリアル。アーニャにはモデルがいると言うが、まるで故郷の町の変貌の象徴のようだ。父を探してやって来たヴァレリー青年の自宅には、紛争地域からの難民一家が住みついている。世界中から立ち入り制限区域（発電所から 30 キロ圏内）見学の観光バスは続々とやって来るが、町は死んだままだ。原発事故がどんな結果をもたらすのか—改めて考えさせられる。

## 『故郷よ』

仏・ウクライナ・ポーランド・独合作映画 (108 分) / ミハル・ボガニム監督

2 月 9 日よりシネスイッチ銀座他全国順次公開

© 2011 Les Films du Poissons

